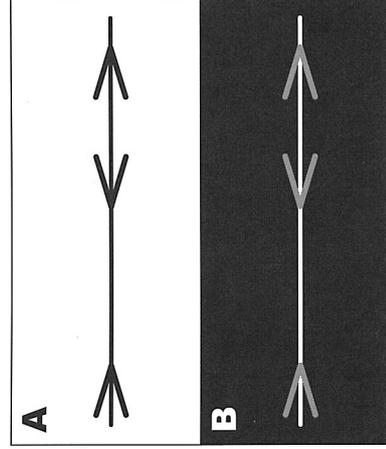


動くミュラー・リヤー錯視

北岡明佳



代表的な錯視を挙げよと言われれば、何はさておきミュラー・リヤー錯視である。線分の両端に外向きの矢羽を付ける（外向図形）と長く見え、内向きの矢羽を付ける（内向図形）とその線分が短く見えるという現象のことである。

しかし、この錯視は発見から百年以上経過しているのに、十分納得の行く説明を聞くことは難しい。例を挙げると、遠近法説という人気のある仮説では、「外向図形は線分が遠くに見え、内向図形は線分が近くに見えるから、大きさの恒常性により前者は過大視され、後者は過小視される」と説明されるのだが、その考え方には合わない知見も多い。

ところがである。昨年私は、ミュラー・リヤー図形に静止画が動いて見える錯視があることに気づいた。外向図形では矢羽は外向きに動いて見え、内向図形では矢羽は内向きに動いて見える（図Aでは、中央の矢羽が右に、左右の矢羽は左に動いて見える）。動きの方向に位置がずれて見える現象がいくつか知られているので、その考え方でミュラー・リヤー錯視が説明できるのではないかと興奮した。

しかし、その画期的な仮説は短命であった。図のコントラストを反転させてから矢羽を灰色にしてみたら、ミュラー・リヤー錯視はそのままなのに錯視的動きの方向が逆転したのである（図Bでは、中央の矢羽が左に、左右の矢羽は右に動いて見える。残念無念。

あきらめずに頑張るなら、以下の通り。図Bのミュラー・リヤー錯視は図Aよりも錯視量が少ない。この差は、動きの錯視による位置の変位によるものかもしれない。

（またおか・あきよし 知覚心理学）